眼鏡と白内障

長谷川　修

子供の頃から眼が悪かった。十歳の時黒板の字が見づらくなり眼科へ行くと、近視であり眼鏡を勧められた。当時田舎の小学校では子供は外で遊び回っており、眼鏡をかけている子はクラスに一人か二人で、極めて少数派だった。その後も歳を追って近視は進み、十代では一～二年毎、二十代、三十代では三～四年毎に、レンズの度が合わなくなり眼鏡を買い替える。近視の進行に矯正が追いつかない状況で、会社員時代は麻雀ではチョンボが、ゴルフではロストボールが多かった。

一般に近視の者は老眼になるのが遅いと言われるが、私の場合、四十代半ばのある朝、新聞の一部が黒い塊りとなっており、人並みに老眼が始まった。五十代からは眼鏡を二つ用意し、日常の生活用と読み書き用と眼鏡を外して小さい文字用と、三様に使い分けることになる。眼鏡を二つ携帯する生活は、会議の席でもう一つを横に置き、また頻繁にかけ替えたり外したりで落ち着かず、不便きわまりなかった。

七十代にはいり片眼の像がぼやけてきた。近所の病院で診てもらうと「白内障が進行中だが、もう一方の眼は問題ない。しばらく様子を見て両眼一緒に手術しよう」とのこと。三年程経過観察を続けたが、担当医はなかなか手術をしようと言わないので、「太陽の光がまぶしくて困る」と申し出てやっと手術になった。

手術はいたって簡単。片眼に一五分で日帰り、十日ほどの間隔を取ってもう一方を行い、全てが一月足らずで終わった。手術後は周りの景色がすっかり変わり、鮮やか・くっきりになったが、それにもまして人工の眼内レンズで視力が回復したことはうれしい。眼内レンズは五十㎝～六十㎝に焦点を合わせており、視力は裸眼で〇・八、矯正視力は一・二で、当然眼鏡は一個で済む。

明治前期生まれの私の祖母は、繕い物の針に糸を通せなくなったことを嘆き、月が二つ見えると言いながら死んでいった。医学の進歩にあずかり、今しばらくは心おきなく本を読むことができ有難いと思う。